

監修 大佛次郎 川口松太郎 木村毅

講談社

大衆文学大系

5

大衆文学大系 5 前田曙山 本山荻舟 平山蘆江集

昭和四十六年八月二十日 第一刷

著者 前田曙山 本山荻舟 平山蘆江

装幀者 田中一光

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二一 郵便番号一二二
電話東京九四五一一二二(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 二八〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

©前田章雄 本山みつ 平山清郎 一九七一年

目次

前田曙山集

落花の舞

本山荻舟集

近世数奇伝

一刀流物語

二刀流物語

平山蘆江集

唐人船

五

三三

三〇

三九

五三

熊
本
籠
城

解 解
題 說
年 譜

七
三

八
四

八
三

八
五

前田曙山集

落花の舞

女の危難

「うむ好い景色だ。同じ道中でも駿河路へ入ると、魂がなやされるように、のんびりとだるくなつて了うぞ。」

暮れかゝる松並木の春の夕鵬の中から、薄紙をはがすように現れて来た旅の武家は、突と立止まつて快い気持ちに四辺を見廻した。何処とも知れず、チラ／＼と花が散つて来て、狂う蝶のように、足許にしなだれかゝる。

桶師で名高い小吉田の宿を後に、紫霞む竜爪を右手に仰いで、駿府を指して歩いて来る。此辺で日が暮れては、定宿へ着くのは少くも戌刻半、遅ければ亥刻にならねばならぬ。如何に武家とは言いながら一人旅、此頃の物騒沙汰に、大胆過ぎるよ

うに思われるけれども、其不用心の道中を突破するだけの自信を、勇ましい筋骨に蓄えて居るのであらう。柄袋かけた腰の物には、緊張した虹の光が、五彩の燦めきを輝かす。突然何とも知れぬ甲高い悲鳴が、行手に方って平和な空気をふるわした。其声の必死の叫びが、心得ある武家の耳へ鋭投するように突通る。

侍はきつと行手を見すえた。四十近い屈強の男振だが、旅衣装の氣附や好みに、家中者ならぬ粋な匂がほめく。

忽ちバタ／＼と大地を蹴立てる乱拍子の蹻音、ハツと思う間も無く、飛附くように其処へひざまずいて、武家の袴へすがり附いたのは、此の快い春が生み出したような艶にあでやかな若い年増だった。

「悪者に出会いました。何卒お助け下さいまし。」

女のぬめ／＼と柔かい撫肩には、慌だしい息づかいが、いじらしく脈を打って居る。武士はほとんど何事をも考える事無しに、本能的に女を後へ囲った。事は是非に拘らず、弱い者を助けるのが、侍の面目というよりも、寧ろ女を助けるというものが、時に取つての満足だったかも知れない。

「コレ／＼、其女に用が有るんだ。此方へ寄越せ。」

「邪魔致すと打斬るぞ。」

一刻の猶予も無く追い迫つて来たのは、地廻りの破落漢と思いの外、二人ながら半面を包んだ浪人風の怪しい侍だった。

「黙らっしゃい。様子は知らぬが、弱い女を武士が二人して追廻すとは卑怯千萬。」

旅の武士は、落附の有る凜然たる声で男らしく言い放った。

「横合から妨げ致すな。女を寄越さねば刀にかけて申受けるぞ。」

女は手詰の掛合に、ブル／＼ふるえながら、

「旦那様、どうぞお助けを。」

「うむ、心配致すな。」

女にすがられて、武士の俠血は益々華やかに緊張し來った。相手は敵を一人と見て、脅しの大刀を引抜き、矢庭に斬りつけてゐる。アレーという女の悲鳴は更に悲痛な響きを虚空に甲走らせた。

然し何処までも女をかばうだけ有って、旅の武士の手の内は、氣持よい程鮮やかにさえていた。刀の柄に手もかけず、雲突く大男を左右に投飛ばして、仁王立に立はだかつた凛々しい男振は、たよりない女の寛束ない魂を、フラ／＼と吸い寄せる程、いみじく鮮やかである。

「白痴奴。」と、旅の武士は逃げて行く二人の浪人の後影を見送りつゝ、勝誇った微笑を一文字の口許に痙攣さした。

年 増 盛 り

破落漢の浪人は、たゞ徒らに虚勢を張つたばかり、旅の武士に投げ附けられて、とても適わぬと思つたかして、雲を霞と逃げ出してつた。後は元の静けさに復つて、夢からはのめくように、山桜がチラ／＼と降りかゝる。其広重の画のような景色の中に、男らしい男と、女らしい女とがヤンワリ取残されたのは、今流行る豊国の名画を柔かく置忘れたような氣がする。

「いや飛んだ災難で有つたが、別に怪我過ちは無いか。」

武士は華奢な女の弱々しい姿を、寧ろ傷々しく撫でてやりたかつた。

「難有う存じます。お蔭様で危い処を助かりまして御座います。此御恩は忘れません。」

雨を傷む海棠の、雲間洩る甘い日差しに微笑むようなしなやかさが、武士の好ましい目先を繰はゆく封じ込めてつた。

「いや／＼、礼を言われる程の事はない。ほんの空威を致してやつたまでじゃ。して御身は此辺の御仁とも見えぬが、何でさびしい街道筋へ伴れもなくたゞ一人で。」

女は此頃流行の桑三番で、襟のかゝつた衣服、仇な姿が万更粋者とは見えぬけれども、濃厚な年増盛りの、水の垂れそうな美しさは、粋で高尚に爛熟し切つて居る。到底此辺の田舎廻りには見られない拾い物だつた。

「ハイ、妾は駿府具服町の塗物屋の案内で、今ではさびしく後家を立てゝ居るたより無い者で御座います。」

温かい雪のなめらかな手触りを思わせる横顔に、京紅を薄めたような紅がほのめく。

「ホウ、御配偶が有りなさらぬのか。」

配偶の有無が、此場合自分に關係した事では無いのに、旅の武士の心は、有るよりも無い方に、喜ばしくよろめき込んで行く。

「ハイ一昨年亡なりまして、夫から独りで暮して居りますので、種々うるさい事ばかりで御座います。今日も抛らない用事が御座いまして、清水まで参りました戻り路、つい此先で今の御武家さんが二人、お刀を抜いて振上げなすつたので、駕籠屋は駕籠を投つて逃げています、妾は捕まつて、すんでにあぶない処を、漸く逃げて参つて、旦那様のお蔭で、命拾いを致したのでございます。旦那様、此御恩はモウ死んでも忘れません。」

美しい女の感謝が、旅の武家の熱い血をどれ程高めたか知れない。

「然らば御身も戻り道、乃公も之から駿府へ参る者じゃ、送つて進ぜよう。」

「マア御親切に、……では恐れ入りますが、御言葉に甘えま

して。」

女は左も／＼心からうれしそうにイソ／＼して連立った。男の心をあやなくくらませるような麝香の匂が、邪慳に柔かい感じをいつかすると、快い液体の火が足の爪先から月代の真上まで、逆に撫で上るような心地がする。

「まだ妾の名前を申し上げませんでしたけれど、妾はたゞ今も申し上げましたように、呉服町の加女屋という塗物屋の咲と申すもので御座います。」

「オウ、彼の加女屋の御内室だったか。」

加女屋は駿府一の塗物問屋で、公儀の御用を勤める程の家柄である。若しかしたら此の美女が、笠松峠の鬼神のお松となるのでは無いかと、いさゝか不安だった彼は、始めて心から安堵する事が出来た。

加女屋の若後家

「失礼で御座いますが、旦那様は。」

人なつこいお咲は、こぼれかゝる愛嬌を赤い刺身のような沢沢しい唇に浮べ、鮮やか過ぎる程色っぽい目に、千万無量の媚を盛上らせた。武家の心は次第にソワ附き出して、たつた今、二人の浪人を叱り附けた鋭い意気は、フウワリと気抜けしたようになる。

「何処の者と見えるな。」

「夫はモウ御江戸からいらしたので御座いますとも。……妾も元江戸で御座いますから、どんなにかお慕かしゅう存じます。」

鮮やかな目の冴は、又しても矢継早に、武家の心の全部を甘くそぐり立てた。

「左様で有ったか、乃公も御身が此土地の人ではないと存じ

た。」

始めて見た時の感じが、自分を裏切らなかつたのを満足した。

「旦那様は御直参でおいで遊ばししょう。恐れ入りますが御名前を伺わせて下さいませよう。」

「流石に目が高いな。察しの通り乃公は公儀の旗下で、佐伯内膳と申す者じゃ。」

「オヤ、夫では飯倉に御屋敷の有る、御小人目付の佐伯様でおいで遊ばす。」

「どうして存じて居るのじゃ。」

内膳は突き飛ばされたような驚きと、浸み透るような満悦とにかきまわされた。

「妾は以前森元で育ったもので御座いますから、御屋敷の御近所は能存じて居ります。」

「オウそうで有ったか。世の中は広いようで、狭いものじゃな。屋敷の近所の人に、東海道の小吉田で逢おうとは思わなんだな。」

「これも御縁で御座います。……ですが旦那様、実を申すと、妾が清水へ参りました用事と申すのも、内実旦那様のお為にした事で御座います。」

「ホウ不思議な事を言われるな。見ず知らずの乃公が、何時此辺を通行するとも知れぬのじゃが。」

恰かも海鼠のようにゆるんだ内膳の胸は、氷の刃で突き刺されたかと思う程、飛び上るばかりに刺戟された。

「旦那様は御上の大切の御用で、上方へお登りなされるので御座いましょう。」

星を指された内膳の顔には、苦しい当惑がのた打った。

「駿府御奉行の藤山能登守様から、御内々で伺いました。そうして能登様の仰しやるには、此頃中は勤王方の悪い浪人達が立廻って居るから、佐伯殿に万一の事があつてはならぬによつて、夫となく見え隠れに警護するようにしたいが、さればとて上役人を配ると、かえつて忍びの御使いという事が知れて了うようなものだから、其方が知合で、清水次郎長と申す男、彼は無類義の堅い者だによつて、其方から彼に頼んで乾児の者を配つて、駿府までの道中を、内々警護させてくれるようにとおっしゃいますので、妾が其御使いに清水へ参つての帰るさ、かえつて悪浪人に尾けられて、旦那様にお助けを戴いたので御座います。」

お咲は佐伯内膳の秘密を、知り過ぎる程知つて居た。駿府奉行から慍した隠密を承わる女ならば何も自分の身分を包み隠す事はないのだ。然し大家の内室を間者に使つて、辛く人目を避けねばならぬ程、勤王浪人の跋扈が甚だしいと聞いて、流石の内膳も、襟元が薄ら寒く感じた。

秘密の使者

佐伯内膳が京都を指して登るのは、重い上役人の二三の人より外知る者はない。駿府町奉行が其用向を知つて居るさえない思議な位なのに、其町奉行が次郎長などという顔役を頼んで、内々警護させて呉れる為、御用町人の家内を使者にするのは、どうやら輕拳のような不安が無いでも無いが、其為に思わぬ美女と知己になった事を考えると、藤山能登守が月下氷人の粹なさばき手であつたような、言知らぬ感謝に漂わされる。

「此度の旦那様の御用は大層御大切にそれで御座いますね。旦那様の御使柄一つで、大公儀が立つとも潰れるともするのだから、御座いますから。」

「そんな事はないが、然し大切な御役を仰せ付かつて、ありがた有いようなものゝ、実は一方ならず心痛致し居るのじや。」

なまめかしい話相手に、内膳の気は柔かく浮いて来た。大事な御用を持つとは言え、此まゝ夜の明けるまでも駿府へ着かずに歩き続けたいのだ。

「何でそんなに御心配で御座いますえ。」

「乃公が目の黒い中は大丈夫だが、暗夜の隙は防ぎ兼ねの道理、どのような事が起つて、乃公に途中で過ちがあらうものなら、大切の密書が、勤王方の手に渡らぬものでも無いのじや。すると公儀御重役方の御苦心も水の泡となるでな。」

「旦那様は大切の御書付をお持ちなら、よく／＼人の気が付かない処へ、仕舞つてお置きなさいましよ。」

「うん、申すまでもなく、其の御書付は乃公の肌附の腹巻の中へ、油紙にはさんで縫込んであるのじや。」

此言葉を聞くと、お咲の小気味よく鮮やかな眉に、明るい満足の色がさえて、薄手な肌理の下を飛ぶが如くに走り過ぎた。然し夫はたゞ一瞬の表情に過ぎなかつたから、微塵も疑いを持たぬ内膳には元より其影をだに認められなかつたのである。

「夫なら御安心で御座いますけれど、不用心な風説が御座いますから。」

「もつとも乃公が殺されても、外にモウ一人、同じ御用向で出かけた者があるで、二人の中一人が京都へ着きさえすれば、御上の御用は足りるのじやが、然し御書付が勤王方の手に入れば随分面白くない事になる。」

お咲が町奉行の機密に参じて、自分が道中の役目まで知つて居るのだから、何を話しても大丈夫だと信じた。

「オヤ、旦那様の外にも矢張り御用向で。」

お咲は秘密の使が、踵を接して雁行するとは知らなかつたら

しい。

「多分三四日は遅れて参るかも知れぬ。其節も然るべく手配を頼む。……乃公は何者が手抗おうとも恐れはせぬが、後から来る者は左様も参るまいから。」

「旦那様のように手が利いておいで遊ばせば、浪人なんぞ少とも恐くは御座いません。」

お咲の濃艶な身体が、何時しかびったりと寄り添うと、麝香の得ならぬ髪が、内膳の下腹を逆に撫で上る程、生温い感じを浸み込ました。彼は快い悪寒に取つかれて、不随意の武者ぶるいが意地悪く込み上げる。

「何卒之を御縁に旦那様。」と濃艶な年増の目はなまめく。

「いや乃公こそ。」

甘い心が危く蕩めきそうになる時、お咲は急におびえた。

「あれ何だか薄気味の悪いものが。」

突然内膳の手に柔かい力を獅噛附かせると、内膳は我知らず懐を明けて、牡丹の花のむらがるような身体を思い様抱き込んだ。

衆三番の女

「人殺しだぞ。マア行つて見させえ、立派な旅の御武家が殺されて居さしやるだ」とよ。」

「何処々々。」と、土地の者は土気色の唇をふるわせ、顔を見合せつゝ戦き替える。

街道筋の並木外れ、道祖神の洞の椽先に、無念の拳を握りしめ、歯をかみ、目をいからして倒れて居る侍は、昨夜加女屋の若後家お咲を助け、共々駿府の方へ連れ立って行った御小人目付の佐伯内膳だった。

彼が敢なく此処で殺された時に、道連のお咲は、下手人に誘

拐されたのか、夫とも命からく逃げて去ったのか、何れにしても、あてやかな年増の姿は見られなかった。

土地の者の急報によつて、定廻りの同心も来れば、手附の御用聞も駈附けた。そうして仔細に検めた処によると、傷というのは右乳の上をたゞ一刀、如何にも見事に突き刺してあつたが、其傷口から推して、女持の護身の懐剣だという事がうなずかれる。然し内膳程の心得ある武士が、刀も抜き敢ず、こうまで他愛なく十分に刺されたのは、よく／＼油断を見澄されたのだと思うと、其下手人は内膳が安心するに足るだけの近い人でなければならぬ。多分は氣を許した道連という事に当りが附いて行く。

「一刀に突き刺して邪慳にえぐつたのだから、二言と言わず絆切れたに違ひ有りませんぜ。」と御用聞の隼の佐兵衛は、眉をひそめながら言った。

「紛失物はどうじゃ。」と、同心山本久三郎は死体の真上に首を延ばして、何かの証拠を見出そうとして氣構える。

「旦那、こりや物盗じゃ有りません。懐中物も紛失しません、中には小判まで入つて居ます。だがどうも変だ。此奴は事に因ると、紙入より、もそつと大切なものを遣られはしまいか。」

「何ぞ無いのか、佐兵衛。」

「どうも俺の見る処じゃ、佐伯の旦那は大切なものを懐へ入れて持つて居たらしいんです。下手人は其奴が欲しさに、旦那を殺したのじゃ無いかと思われます。御覽なさい懐がこんなにゆるんで居る様子じゃ、腹へ巻付けて居なすつた胴巻のようなものを、手を突込んで抜かれたと見えますぜ。」

流石に捕物の上手だけ有つて、隼のにらむ目は確かだった。

「胴巻なら金子だったろうが。」と同心は訝かしそうに小首をかしげる。

「いえ左様じゃありません。佐伯様は何でも隠密の御使者にお立ちなすつたと言う事ですから、大切な御書付をお持ちだろうと存じます。」

「成程……して見ると下手人は勤王浪人かな。」

「傷の工合から見ると、下手人は女のように思われます。現に手前は、佐伯様の左の拳に、女の長い髪の毛が一筋からまって居るのを見出しました。」

「然し直真影流の達人と聞えた佐伯殿が、幾ら油断しても、女に胸板をえぐられようとは思われぬでは無いか。」

濃霧の中を模索するように、丸で見当も目星もつかなかった。そうして、衣物の襟から振分の小包まで、残る方無く検めたけれども、大事の書付と思われるものは、更に見当らなかつた。内膳の金子其他の持物全部が無事でありながら、敢なく殺害されたとしたなら、其外の何物かど紛失したと認めねばならぬのだ。

佐伯の横死

佐伯内膳の不慮の横死は、百千の火雷が頭上に落ちた様に、駿府町奉行藤山能登守を驚かした。殊に佐伯の身内を残るなく検めた結果、一切の持物が紛失せずに、胴巻を引抜かれて居たとすると胴巻の中には、公儀の運命に関する大切の密書があったに違いない。通用金を目がけずして、密書に目星を附けた処から見ると、下手人は紛れもなく勤王攘夷などと罵り騒ぐ不逞の浪人に相違ないと想像されるが、肝腎の下手人を手繰出すべき証拠というものは、影も形もない。

御用聞の佐兵衛は殆んど血眼になって、小吉田の宿から栗田

村、四辺近所を蚤取眼で尋ね廻った。

此事件に腕の冴を見せさせれば、清水の次郎長などよりは、遙に優った信頼を博し、駿府切つての男になり得るからである。

軒別に当時の様子を聞き糺して歩く中に、彼は思いも寄らぬ風説を小耳に挾んだ。夫は栗田在の京庵という按摩医者が、昨夜深更に抜けるような美女を街道筋で見たが、其女の行歩はさながら飛ぶが如くに早く、あつという中に消えて了つた、あゝいふのが通り魔というのだらうと、隣の者に密々話したというのである。

京庵は直に名主の女関へ引かれて、定廻りの同心山本久三郎から、厳しくたゞされた。思いもかけぬ十手の光に、京庵は一たまりもなく縮み上つて、昨夜出会つた一伍一什を恐るゝ述べ立てた。

「手前が患家へ参りまして、彼晩道祖様の御宮近く帰つて来ましたが、彼此戌刻過ぎで御座いましたらうか。薄月はありましたが、霧が深いので、四五間先は丸で見えない位でした。其時かすかな足音が、後からバタ／＼と追つて来ました。其音がどうしても華奢な女でなければならぬような、軽い響きで御座いました。……此さびしい往還を何処の女が来たのかと立止まりますと、直ぐ目の前に姿を現しましたのは、夫は／＼見た事も無い、目覚ましい綺麗な女でございました。手前はゾッとする程総毛立まして御座ります。」

佐伯の傷口が、女持の懐剣にかまれた痕だったのを思い寄せて、山本同心も佐兵衛も片唾を呑んだ。

「どのような装を致し居つたな。」

「髪は流行の衆三で、衣服は襟のかゝつた柔か物、羽織は着なかつたかと思ひます。」

「髪は乱れては居なかったか。」と佐兵衛は横から尋ねた。檢視の際佐伯の拳に女の髪の毛が一筋からまって居たのは、断末魔の苦しみにあがいて、下手工の髪へ手をかけたかと推測される。

「手前もつい其処までは心付きませんでした。もともと丸髻とか島田とか言うのですと、ガツクリ引繰返ったのも判ります、何分にも扁平^{へいぺん}たい髪で御座いますから。」

折角見出した一筋の髪の毛も、どうやら大した証拠にもならないらしい。

「夫から女は何方へ参ったか。」

「府中の方へ、手前を駈ぬけて行きましたが、然し何分にも足が早いので、直に見えなくなりました。」

佐伯が殺される時に、其附近を美しい年増が通行したのと、佐伯の傷が女持の懐剣だったことは、引放す可からざる事実となつた。

伊豆甚の寮

雲を握むようで、全く手掛りはないけれども、衆三番の水も滴たるばかりの美女が、飛ぶが如くに駿府の方へ行つたという京庵の言葉を、唯一の手掛りにして佐兵衛は辿り辿りて、狷大が獲物の跡を嗅で行くように、終に府中の城下まで入つて来た。

途中若い者が二人まで、夜遊びの帰りに、さびしい田舎道で思いもかけぬ美女を見て、かえって物恐ろしくふるえ上つたという証言を得たのが、佐兵衛に取つては、鬼の首を取つたような喜びだった。そして夜の子刻近くに、其美女が府中に入つたとまでは推測されたが、お城の後の水落あたりからは、全く蹤跡を絶つて了つた。

水落や草深は町とは言い条、駿府同心の組屋敷ばかり、子の刻という夜更には、家の棟も三寸下るばかりに陰森として、人つ子一人通行する筈はないから、怪しい年増の美女が、生垣続きの夜の暗に消え込んだ落付き先を、到底見当附ける事は出来ない。

佐兵衛が必死の意気込は、空しく力を抜かれて了つた。然し夫から町家続きへ行くには、木戸もあり、自身番もあるから、もし暗にも目立つ女が通行したのなら、誰かしら発見すべき筈だが、何処の町内の夜廻りも、昨夜中そんな女を見なかったという。すると怪しい女は、水落が草深辺で地の中へ吸込まれたように消えて了つたのだ。

公儀大切の隠密を殺害して、胴巻ぐるみ密書を奪い取つた大それた曲者は、勤王方で無ければならぬとすると、水落や草深は公儀御家人の組屋敷であるから、其処に隠れ潜もう筈はなかった。然し組屋敷の外には、さうやかな荒物屋や一文菓子屋が有るばかり、外を通れば勝手の下流しまで見通される小さな家に、ふるえ附くような年増が潜んで居れば、誰が目にも直ぐと知れる。

「旦那、もしかしたらば彼処じゃあ。」と額を悩ました揚句に、御用聞の佐兵衛が唸り出した。

「乃公も彼処じゃ無いかと思つてゐるんだ。」

恠う答えた山本同心の顔には、当惑を行き詰まらせたような難色がうらたえた。

二人は顔見合せて、息づまるような苦しさに呻吟するばかりである。

彼処とは何処。夫は駿府御用達伊豆甚の寮を借りて、二月ばかり前から逗留する京の客人、表面の届は中院家の諸太夫、御所の絵所を承わる柳川采女という者で、君の仰せによって、三

国一の富士の景色を写すが為に駿河路へ下られたと言う事だが、誠は高野大納言の弟君で、新少将資通朝臣と呼ばれる高貴の殿上人であるという事が、公儀の隠密によつて報告されてあったから、駿府城代も町奉行も、此人の取扱ひには、殆んど眉を洩らして餅について居たのである。

然も新少将資通朝臣が、血なまぐさい暗雲うす巻く今日此頃、富士の姿を絵絹に写すが為に、遙々駿河路まで下られる道理は無く、必然勤王浪人の尻押となつて、公儀を呪う為に違ひないから、内膳を殺害した下手人の女は、恐らく此草深の寮に隠れて居るに相違ないのだ。

「佐兵衛、手前彼寮へ忍び込んで見たらどうだ。」と、山本同心は之より外に方法はないと思ひ込んだ。

「手前も左様思つて居たのです。構う事はありません。今夜から床下へ潜り込んで見ましよう。」

丸窓の中

御用聞の佐兵衛は、寒竹の生垣を潜り抜け、櫛の中垣を越して、息を殺し、片唾を呑込みながら千辛万苦して漸く寮の庭へと忍び込んだ。

書院から渡廊下で繋がつて居る小座敷の丸窓には、紅い燈の影が、柔かに揺いで、池水に歴々と窓の障子を映して居る。さながら大きな月が、水の上に浮び出たようで、其月影を乱すのは、鯉が散り浮く花をせよる小波の波紋である。今を盛りの桜は、庭の只中に枝もたわゝに咲き誇つて、冷たい夜風にヒラヒラと散つた。

窓の中には二三人の人が、外にうかゞう者ありとも知らずに、先刻から話し続けて居るらしい。忽ち障子に映つたのは、大警の侍姿である。

「此度彦根中將が大老職に召出されましたからは、必定御所様に対して、然るべき御取扱ひは致すまいと甚だ心外に存じまする。」

大警の口許の動きが、明かに見て取れる。そうして話題となつたのは政道向の事であつたから、佐兵衛はスワコそと、石のように身を硬ばらした。

「いや、掃部頭が大老を承わろうとも、一朝一夕にして、取扱ひをかえる事も御座るまい。」と、他の一人は樂觀的に応じた。

「ほんに左様じゃ。如何に関東公儀が情というものを知らぬにせよ、今日より以上に悪い御取扱ひはなるまいと思う。」

其声は金珠銀珠を八面玲瓏の玉盤の上で弾ませたような、妙なる天楽其まゝに響く、彼の細い淨らかな鶯の初音が、果して男の声音だらうかと思うと、佐兵衛は草深で消え失せた怪しき女の姿を見る／＼目前に朦朧と画き出した。

正しく女は此寮に居るのだ。草深まではどうやら蹤跡が判つて、其先が掻き消すように失せたのも道理。此寮の中に高野新少将資通朝臣の袖の下に隠れ、女だてらに羅刹天女の魔の剣を振つたのであつた。

高野家は数ある雲上汰の中にも、代々勤王無比の家柄、宝曆の昔竹内式部の勤王沙汰の時も、真先に禁中奉仕を停められた程、無比の忠節を捧げて居る。其血が脈から脈へと伝わり流れ、次第々々に培い來つて、今日の時勢に芽を吹いたとする、油断も隙もならぬ恐ろしい公卿である。其弟君の新少将なれば、不思議な女を手先にして佐伯内膳を殺めた上、公儀の密書を奪ひ取つたのが、成程と合点されるではないか。

佐兵衛の筋骨は、あらん限りの緊張を来し、荒い息づかいを肩で殺しながら、すこい眼を張はだけた。そうして何とかして、其正体を見届けようとしてあせり悶える。せめて女の影な

りと、障子に映つて呉ればいゝと祈つたが、邪魔な大警は席を動いたけれど、代つて映つたのは、矢張男の影だった。さながら佐兵衛の潜むのを知つて、無言の仕方で、いらつく心を悶殺せんとするのである。

「昨夜三更、小吉田の宿外れで関東隠密の者が、何者にか殺害されて、大切な密書を奪われたと申す事で御座るが、定めし御聞き及びで御座りましょう。」

話題は佐兵衛がねらいの的にピッタリ嵌つて来た。其答え一つが、海か山かの岐れ道である。然し佐兵衛が追き込むに反して、座中には気味の悪い程の沈黙がもどかしく拡がった。

皮 肉 な 悪 口

外に人がうかゞうとは知らず、全く気を許して油断する会合であるから、此答えこそ真正銘偽も隠しも無い真相に極つて居ると思うと、佐兵衛の胸は翼に落る獲物を見ている様に、怪しくソワ／＼と躍った。

然し彼が十分の期待を裏切つて、中の応答は急に低くなり、何やら二言三言言うのが、くど／＼と聞き取れなかつた。

佐兵衛はいま／＼しく下唇をかみ、拳を震わしてもどかしがつた。水の月の手に取れそうで取れず、靴を隔てゝ痒きをか／＼思いに悩まされる。然も其の密々声こそは、天下を震動する恐ろしき叫びで、雲を起し、風を呼ぶ大悪魔王の呪いなのだ。

彼は何とかして、声を聞きたい、中を見たいと、伸び上り爪立ちあせつて、丸窓近き蜜柑の木のこんもりした中にもぐずり込んだ。然し中の話は依然として聞えないが、肝膏の処になつて、急に声を落したのを以ても、怪しい衆三番の女が、丸窓の障子一重の中に、媚めかしい濃艶な香いはのめかし、虫一匹も殺し兼ねる顔をして居るに違いないと思うと、佐兵衛は胸先

を引かき破りたい程口惜しくなつた。
「下手人が女であろうとは、どうも誠らしく思われませぬ。」と、低い話が突如として高調子になつたのは、大警の太い鈍声だった。

「だが女なればとて、一心癡れば人一人位何でも御座らぬ。況して相手は公儀直参のヘロ／＼武士、指で弾けば飛んで行く。先ず例えて言へば、薬で縛つた海鼠が両刀を帯して居るのじゃ。形は武士でも彼等は武士の魂というものを置忘れたのじゃわい。」

相手は痛快な程、皮肉な悪口を振廻す。

「どうじゃ、駿府役人の手際で、其の下手人は召捕れようか。」大警が気になるらしく尋ねた。

「何の江戸表でさえ、示しが付かないのじゃ。此の駿府奉行の不浄役人などに、下手人が捕まつたら、三国一の富士の山が一夜で元通り凹んで了うて。」

皮肉者は罵り得て益々邪慳である。外で聞く佐兵衛は、己れやれと燃えるような膏汗をジリ／＼さした。今に見ろ、其の富士山を一夜に凹まして見せるぞと、腹の中は湯玉のたぎるよう。

「だが却々油断はならぬのじゃ、近頃賤しき目明しなどを駆り集め、隠密として八方に放ちますで。……御当家などへも、定めし内々入り込ませる事で御座ろう。」

「左様で御座るとも。然し此の寮へ見当を附ける事が、既に見当違いで御座るが、御用聞などというものは青い眼鏡で人を見るから人が矢鱈に青く見える。御前の御身の上が御身の上で渡らせられるによつて、御当家を勤王の巢とも思ひ居るので御座らうが、先程寒竹の垣を乗り越えて、下賤な面相の犬奴が御庭へ忍び込んで御座る。定めし何処ぞの叢の中で、此方の話を聞いて

て居ようも知れませぬて。」

皮肉者の言葉聞いて、大警は赫と激した。

「間者が居るとな。」

ガラリと丸窓の障子を明けると、紅い燈はさつと射るように映した。佐兵衛は命がすり減ったかと冷りとしたが、其まゝ地に伏して、偶りなく中なる美人を見る機会を得たのを感謝した。

果して美人か

誰知るまじと思つた佐兵衛の行動、どう考えても寛れる筈はないのが、敵は居ながらにして、知り過ぎる程知つて居る。何処かの叢に隠れて居ようとは、此蜜柑の生茂る木立を見透して居るのだらうか。

佐兵衛は身体が瘦る程にふるえ上つた。出るも引もならずして、此のまゝ地の中へ減入り込む外、身を隠す道はないのだ。然し咄嗟の危急にも、図太く気の働く彼は、守宮のようにひたりに地に吸い付きながら、室内の魔性の女を一目見ようとした。敵の正体を認めさえすれば、御用聞の役柄として、一時の満足を味わたるのである。

彼は極めて徐々と頭を上げ、上目づかに目を光らせて行つた。幸い眩しい燈は真面にさゝないで、蜜柑の葉先をかすめたまゝ、泉水の上へパツと拡がって行く。白い桜の花片が、チラリチラリと其光の中へ散り込んだ。

「コレ、其様な犬とやら猫とやら、咎めるものではない。此武陵桃源の夢の国の中じゃ、気まゝに遊ばせて置いたがよいぞ。」

又しても銀鈴を振るが如き美音が訝え渡つた。佐兵衛はさてこそと、片唾を呑んで首を伸ばした、さながら毒蛇が物すごい

鎌首をもたげるように。

先刻は障子が閉つて居たから、たゞ声を聞くのみだったが、今こそ大きく明け放されて、銀燭の光は燦としてまばゆく、彼方が昼より明るいに反し、此方は黒白も分けぬ暗さである。今こそ其本体を認めさせるように出来上つたではないか。

「オウ桜が面白う散るの。」

又優しい声が聞えて、燭影がヒラと動いた。偕は誰かと現れて来るのだ。大警の侍は座を入れ代つた。皮肉者もうや／＼しく席を避ける。

三条三番の濃艶な年増の輝き、夫がどのような美しい女だろうと、佐兵衛は捕物という役目の外に、一種の好奇心を咬り立てた。

錦絵で見る豊国の、憎らしい程妖艶な絵姿に魂が入って、男という男の魂をズル／＼と引出すのでは無いか。遠山の眉の色めき、美玉の首のなまめき、織美な素足に緋縮緬の蹴出しを思い浮べると、佐兵衛の胸から淫蕩の火焰が、焼き附くように燃え出した。

彼は口が涸れて、咽喉が聞き分けなく妙附いた。下腹から胸へとかけて、年甲斐もなき動悸がうずく。

ただ一刻一瞬の間が、百年の長さに覺えた。待ち設けた人は今や咫尺の間に現れんとして、明け残された障子に、大きな影がさして来た。佐兵衛の喘ぎ込んだ魂は、たゞ其の二つの眼に精力を集中させる。

「垂れこめて居るよりも、爽かな夜風は、誠に氣持のよいものじゃのう。」

玲瓏なる声音が、佐兵衛の潜み隠れた頭上に玉を転ばした。彼はハツと思つて、比目目のような目で、恐る／＼見上げた。

果して美人か。